

職業としての芸術

吉岡 洋 京都大学 文学研究科 教授

[講演の概要]

芸術は「自由」なものであると人は言います。また芸術は「個性の表現」であるとも言います。算数には正解がひとつしかなく、みんなそれを目指して努力しなければならないが、お絵描きの時間は何を描いてもよく、また自分の好きなように描いてもいい——学校でのそうした経験が、芸術とは「自由な個性の表現」であるという通念を作り出すのでしょうか。

反面、芸術を職業にすること、つまり芸術によって「食べていく」のは難しいということも、よく言われます。これは何を意味するのでしょうか。つまり「自由な個性の表現」には、ごく少数のお金になるものと、商品価値のない多数のものがあるということの意味します。では、何がそれを分けるのでしょうか。それは「才能」であると多くの人は考えています。

作品制作や芸術市場の生々しい現場を知っている人は、「自由な個性の表現」などという理想を笑うかもしれません。それでも芸術作品とは、どこかにそうした理想を秘めているからこそ商品価値があるのです。お金の世界を越えているからこそお金になる、という逆説がそこにはあります。

このことは、芸術は通常の「職業」ではないからこそ、職業として成り立つ、という逆説として言い換えることができます。

[プロフィール]

京都大学文学部哲学科(美学専攻)、同大学院修了。甲南大学・情報科学芸術大学院大学を経て、現職。専門は美学・現代思想。著書に「情報と生命—脳・コンピュータ・宇宙—」(共著・新曜社)、「<思想>の現在形—複雑系・電脳空間・アフオーダンス—」(講談社)など。批評誌『ダイアテキスト』(京都芸術センター、1-8号)編集長。「京都ビエンナーレ 2003」、「岐阜おおがきビエンナーレ 2006」総合ディレクター。